

岩手支部

宮古地区電友会
盛岡電友会
釜石地区電友会
北上電友会
おおふなと電友会
遠野地区電友会
水沢地区電友の会

あの時、NTT宮古3階のOBサロンでサークル活動中、今迄経験した事のない激しい揺れに皆絶句。戸惑いながら道具を片づけ「今なら間に合う」と出口に向った。現役社員の方々に「外に出てはダメ」「帰ってはダメ」ときつく制止された。この真剣さに圧倒され従うべきと心し、5階へかけ上った。黒い津波が湾から河口へ向い船を伴い防波堤を越え、町を襲う恐ろしい様に立ちすくんだ。ふるえる身体でNTTに一夜した。社員は本命の通信断絶の緊急事態への対応の中、私達珍客に非常食を優先し、暖房の切れた夜は保管してあった祭りのゆかたを幾えにも重ねてかけてくれた。

白々と夜は明け、一面へドロと化した街に昨夜の雪が薄ら覆っていた。昨日の惨状が悪夢であったら、と思うも現実には次から次からと甦り、後で見るテレビ放映より生で見たあの光景ははかり知れなく、想像を絶する自然の猛威は心に深く焼きついてしまった。

復旧作業で多忙な社員がまだ危険だからと心配してくれることに心からの感謝を述べ、ビニール袋を巻き着けるなど何とも不恰好な

あれから2年7ヶ月

宮古地区電友会
城内 富美子

姿でドロとガレキの街へ出た。

変りはてた我町宮古は、大きな船が大通りを塞ぎ、細い路地には車が数々ささりかさなり、商店の品物は汚泥の中にゴロゴロ、宮古の名酒男山もあちこち散乱していたっけ。ちなみに、乗って来た私の車も局舎北側の高い所に位置する駐車場から塀を越え、サークル仲間2台の車も流され路地に、共に廃車の運命となった。

幸い家族や娘家族、最愛の孫達も無事。あの時の惨状を見ただけに私に繋がる人々ほどの様に避難したのか気掛かりで、車が流された私は、一番に自転車を買って市内を自分の可能な範囲で行動開始。

停電の中、避難者を抱える身内に洗濯物や食料等を持ち、停電のトンネルを片道40分かけ数日通った。原発の影響もあり生鮮食品の品薄や高騰で買物に不便しているだろう人達に産直の地物野菜等少しづつ安否確認がてら届け喜んでもらえた。ガソリン不足に長蛇の列、交替で並び満たん。夫の友人、私の知人と被災地を回り隣り町の山田方面へ。それぞれに宛てリュックに身の回り品を詰め込み避難所を訪ね、奥様を目の前で波にさらわれたとの夫の友人に慰めの言葉も言えず唯、涙した。

回って見てごく普通の身の回り品の不足に

気づき、帰ってすぐ、思いつく品々を求め宅配にて送り後日の感激の声に一安心。そのうち支援物資は全国各地から寄せられ充分との報道がされていた。孫達も学校や保育所を通じ絵本や手作りの品々、被災地の子供達を思い心のこもった支援物資に孫と一緒に感謝でした。

あの時多くの犠牲となられたお一人お一人の終り様、一言で語れない状況を後々聞くにつけ第一線で全国各地から携わってくれた自衛隊、警察、消防やボランティアと多くの方々の並々ならぬ精神力にただ感服の至りでした。

今、復興に向け各方面進められています。個人からとりままだまだ私達世代では深刻です。あれから3度目の秋、少しづつメンタル面の活動や作品展も盛んに催される様になりました。目下所属する「絵手紙サークル」のメンバーで被災者へ励ましの手紙を送るなど、あの日、あの時を思い忘れる事なく、近づくきびしい冬にそなえ仲間達との交流を深め歩んでおります。



盛岡地区電友会 澤田 俊夫

3・11その後の私は…

宮古地区電友会
中 濟 寿美子

目に映るものはガスがかかった様にぼんやりとしている。頭の中で思うことを言葉にしても、口から出るのはそれとは違う言葉で、意思の疎通も上手く図れない。帳簿をつけようとしても、計算もきちんと出来ず、訂正ばかりが続く。震災から2年が過ぎた頃から、自分の頭の中で何かが起こっていると感じた。

原因不明の体調不良に悩まされ、体はふらつき、足取りは心許ない。あちこちの病院を渡り歩いた後、内陸に住む娘から脳神経外科を紹介された。医師からCTの写真を見せられて仰天した。脳の左半分が白っぽくなっていく。診断は「脳梗塞」だった。まさか自分が…と驚いた。幸い、原因がはっきりしたことで適切な治療が出来、今では日常に支障のない生活が送れるようになった。以前から営んでいる旅館を維持しながら、趣味の水墨画に勤しむ毎日を送っている。

3月11日のあの日、私は彼岸を前に墓掃除の最中であった。突然、周りに立ち並ぶ二尺ほどの太さの杉がうねりながらひゅうひゅうと音を立て始めた。地震、それも相当の大き

さであった。私は突然の大きな揺れに、何をどうすればよいかわからず、周りの木に囲まれていて逃げる場所もなかったが、比較的木々の少ない場所を見つけ、そこで揺れが治まるのを待った。地震の多い土地に育った身であるが、こんなに大きな地震に遭ったことはない。ようやくの思いで自宅へと戻ると向かいにある消防団の屯所が開き、「津波が来る」「逃げる」との指示。何を持つ余裕もなく娘と避難を始めた。しかし、既に道は車で渋滞し、思うように前に進めない。道の遠く遠くに既に水が来ているのを知り、やむなく車を路肩に寄せ、徒歩で近くの小学校へと向かった。小学校には多くの人が集まっていた。人々はそれほど切羽詰った感じではなかった。しかし、3階の教室に移り外を見てみると、小学校前の道を濁流が押し寄せて来て、見る見る間に水位が上がり、車すら流されて来るほどになった。事ここに至り、とんでもないことが起こっているという空気も人々の間に流れ始めた。暗澹たる気持ちの中で日は暮れて行き、夜の闇がやって来る。ローソクの灯りと毛布もない寒さの中、余震に怯えながら長い夜を過ごした。周りを見渡しても、体を横にはしたものの、眠れた人は殆どいなかったように思う。再び日が昇ると、泥

で足を滑らせながら自宅へと向った。

2階建ての我が家「中済旅館」は他所から流されてきた瓦礫と泥に埋まり、見る影もなかった。海から遠いと思っていた自宅まで津波が押し寄せるなど考えもしなかった。通信網は途絶え、家族や親戚と連絡を取る手段もない。頼れるのは自分の力だけだった。とにかく動かなければ、と次の日から避難先から徒歩で自宅へ通い、瓦礫を取り除き、泥を掻き出した。すぐに避難所との往復の時間も惜しくなり、3日目からは電気も水もない自宅の2階に泊まりながら、片付けを続けた。水は2キロ先の湧き水を何度も汲みに行った。心身ともに限界であったのだろうが、気が張っていたためそれには気付かなかった。生まれ育った山田町は壊滅的な被害を受け、実家は流され、義姉は亡くなっていた。そうした過酷な事実さえも受け入れて動くしか、当時は選択肢はなかった。1月ほどで畳を取り換え、復旧に目途が付き旅館を再開した直後津波により家の土台に被害があり、解体せざるを得ないことが判明した。これからという時のことで、気持ちに整理をつけるのが大変であった。1か月間気力で働き続け、これで一段落したと思ったのに……。しかし解体という現実はどうにも変えようがなく、複雑な心

持の中、先代から続いた旅館は解体され、仮設住宅に入居することになった。

仮設住宅に入ると、どこか空虚な毎日が続いた。仮設住宅は設備が整っているが、自分の家のような安心感はない。旅館再建は資金面での問題が多く、まだ考えられなかった。趣味の水墨画を描く気にもならない。目的のない日々の中で、どんどん沈んでいくような気持ちだった。これではいけない！と自分を奮い立たせるためにも、一念発起して旅館の再建を決めた。75歳という年齢を考えると簡単ではなかったけれども、娘たちの後押しもあり、「よし！これから自分の人生の一步になるのだ。ゼロからの出発だ！」との決意の元で、頑張ることにした。何よりここで止めてしまったら、これからの自分の気持ちが萎えていくような気がしてならなかった。それからは、資金繰りから設計、工事の発注、諸手続きで日夜走り続けた。自分でもよくやったと思うほど、一生懸命であった。NTTや各所の支援、ボランティアの皆さんにも多くを助けられた。そして昨年の春、以前より規模は小さくなったものの、旅館を再開することが出来た。

が、冒頭に書いたようにその頃から身体がおかしくなっていた。大きな問題が片付いたというのに、ようやくやりがいのある毎日を抑えられたというのに、である。恐らく、頑張り症候群でもあり、気を張っていたものがなくなつた途端、それが現れてきたのであろう。医者によれば震災より時間が経つてからこのような兆候に悩む患者が増えているという。みな、震災後それだけ気を張って頑張つて来たということなのだろう。自分もそうであった、と気づいた時、ようやく自分の身体と向き合うことが出来た。今は適切な投薬で症状を抑え、なんとかやっつけていけるようになった。水墨画を描く楽しみも思い出し今年の芸術祭では奨励賞を頂くことが出来た。幸いなことに、絵を描くことには何の支障もなかった。「芸術は右脳だから長く優しく使つて」と同僚にも励まされた。

添付の水墨画は、昨年宮古の市民芸術祭に出品したものである。3月11日の津波が、宮古湾から防波堤を越えて市内を襲う様を描いたものだ。現実を絵として描くことで、その瞬間の記憶を留められるのではないかと思つた。

一連のことを経験して思うことは、何事も頑張り過ぎはよくないということ。未曾有の災害であったのだから、身体にも相当の無理がかかるのも当然のことである。震災から時

間が経った今、その頑張りを労わってあげる番なのだと思う。皆さんも「燃え尽き症候群」にはご用心頂きますよう……。



3.11 宮古湾から防波堤を越えて津波が！！

災害に思う

宮古地区電友会
細越 進

着のみ着のままで大震災に放り出されて数日のこと、ポケットからタクシーの領収書が出てきました。地震発生時から2時間半ほど前のものですが、運の証の気もします。

避難先で出会う人々の話に「危機一発的」なことや「運」についてのことが語られてい

ましたが、多くの方々が経験されたようです。

当日、病院の診療を終え、次の用件までにバス時間の都合で使用したタクシーでした。バスを待ち用件に時間をさいていたなら、現在の私は存在しなかったでしょう。

帰宅したのが14時過ぎで、程なく大地震に見舞われましたが、家族と行動をともしたことがその後を力強く思いました。只、何時も誰かというわけではありませんから、咄嗟の判断が次の決め手にもなります。

「災害は忘れたころにやってくる」と言いますが、「絶対忘れるな」が防災の基本です。人災も天災も、その種類や被害の大小を問わず、何時遭遇するのか解らないのが災いです。

この数十年は戦災から幾多の自然災害まで経験したことは皆さんも同じでしょう。

戦後すぐの台風キャサリン（S22）アイオン（S23）と立て続けの大水害に全てを破壊し尽くされましたが、只一つの命の綱である通信設備の復旧には日夜必死に取り組み、終に声が枯れ喉まで腫れたのも思い出です。

この度の大津波の退いたあとの惨状は、終戦の年、東京空爆で焼け野原と化した光景と重なり一言も出ぬ思いでした。

違うとすれば跡の残骸の姿でしょう。

災害に関しては「大震法S23」があります。が、いろいろな面から大参考になったことを覚えておられます。常に「避難体制」を維持しておくことが大切だと思います。

伝えられている明治の三陸大津波では山の麓まで達し、街を全滅させ多くの犠牲者ができました。その後のたびたび寄せる小さな津波は長い時間をかけて人々を油断させたようにも思えます。

百年近くもの間に海を埋め立て、家が軒並み建てられていくと、海も見えなくなり街路も曲りくねり海から遠くなった感じの人もいたようです。ですが、山の麓までの海拔差はじつに僅かしかないのですから。

住んでいた港の街には防潮も無く、家の前から船も見え岸壁まで二百米ほどですが、明治の頃までは、此処も砂浜で波が寄せていたそうです。道路の下に海まで続く水路があり時化のときは波の音が道路にはめられた鉄の網目から轟くように聞こえてきました。海面との差はごく僅かで、津波には一溜まりもありません。

備えとしては、地震に十分な対策を心がけ、津波には何を置いても即逃げるが我が家の方針でした。

「街が動く」山の上から見た光景です。忘れがちな災いへの心がけ、忘れないで下さい。



細越 進氏が代表でお見舞御礼の挨拶をしました(平成23年12月)

※事務局 三浦／追記

細越さんの住む宮古の楯ヶ崎地区は、二重の堅固な防潮堤で口内外に知られ、守られるはずであった。田老地区に次ぐ大きな被災で、宮古湾に面して建っていた魚市場を始め平地に建ち並ぶ旧い町並はすべてが消えた。

あの時、避難した近くの神社の山の上から見た、沖合いから押し寄せて来る黒煙の波は一体、何物なのか、街が動くような恐ろしさに震えていました。

現在は、宮古市街のアパートに奥様と2人で過ごしています。9年程前に始めた「5行歌」は宮古市の草分けで、定期的に開かれる会の指導者です。「これからの余生を静かに大切に過して行きたい」と語っていました。

「5行歌」3・11から

見ませんか

知りませんか

聞いてませんか

尋ね人

夕闇に悲しく

何んで彼の人か

何んで彼の人も

何んで彼の人を

涙が

尽きた

虫の知らせ

宮古地区電友会
八木 良子

あれからもう2年半が過ぎました。私は2年半前のあの頃、膝が痛くて大槌の治療院に通っていた。あの日はどうも行きたくなかった。夫には再三行け行けと言われたが行かな

かった。午後、すごい地震が来た。義母と2人家にいたが、2人共足が痛く、歩くのも億劫だった。「おばあさん2人で2階にいましよ、津波が来ても2階には来ないだろうから」宮古で用事を済ませた夫が帰って来た。「何をしてる！早く車に乗れ！」と言われて、着のみ着のまま車で織笠小学校の校庭まで上った。祖母は車に乗せたまま外に出た。織小の子供達は「さようなら」と言って外に出た時、大きな揺れが来た地震だったので、先生が「もどきなさい」と言う事で皆が無事だった。後で10分遅かったらと思うとゾツとする。生徒達は危険なので、校庭に集まった。30分位過ぎた頃だろうか、フェンスの所で海を見ていた人達が「ウアー」とか「キャー」とか言う声をあげた。津波が来たのだ。その声を聞いて恐ろしさのあまり泣く子が何人かいた。すごい波が階段の下まで来ていて、ここも危ないと学校裏の階段を登り、コミュニケーションセンターまで行った。

皆が外に集っていたが、落ち着いたら寒くなり、外は暗くなった。津波はもう大丈夫だろうと子供達と一緒に学校にもどった。体育館は広くて寒いだろうと各教室を片付け、それぞれの教室に落ち着いた。私は孫と一緒に教室に居た。夜にはおにぎりが届けられ皆で

食べた。ありがたかった。その夜は寒さで眠れなかった。あの頃を思い出すと涙が出る。あの虫の知らせと夫のおかげで私の命は救われた。いつもテレビで被災した人を見ていたが、まさか自分達が当事者になろうとは思ってもいなかった。

携帯電話もしばらく通じない、非難名簿からは洩れていたもので、娘達には心配をかけた。夫は新戚、知人の安否確認に走り回った。一週間学校の避難所にお世話になり、お風呂に入りたいたので、内陸に住む娘の所に厄介になった。

いろんな事がありました。お陰様で今は落ち着いた生活を送っております。多くの皆様の暖かい支援をいただき本当にありがとうございます。

※事務局 三浦／追記

手記の中の夫、八木善政さんは、NTTO Bで、副会長をしている方です。当日は宮古のOBサロンで行われていたパッチワークサークルの仲間を表敬訪問して自宅のある山田町へ帰る途中でした。車も運転出来ないほどの大きな震れに、急ぎ帰宅したところ、奥さんとお母さんが、津波に気付かず家の中に居た、と云います。もし、夫が来なかった

ら今、この世には存在しなかったでしょう。「命の恩人」だと心底話しています。そして夫善政さんも、もう少し遅れてたら…と。何かを感じたのでしょうか。ほんとうに「虫の知らせ」でしょうか。山田町一帯は、津波と火事で壊滅状態。八木さんの自宅附近は、現在、地盤が沈下し、大潮の時は浸水します。現在、夫婦は宮古市の住人となりましたが善政さんは、出身地の山田で、ボランティア、公民館活動で活躍しておられます。

私の3・11

釜石地区電友会
及川 幹

平成23年3月11日、未曾有の被害をもたらした地震と津波による「東日本大震災」忘れようとしても忘れることのできない災害が起きた日であります。

あの日は釜石の実家から10分程離れた場所、会合に参加しておりました。あまりにも経験したことのないとても大きい揺れにおどろき、津波が来るとは思いましたが、チリ地震津波、十勝沖地震津波でも、海岸の方だけで町の方までは津波が来なかったので、少

し様子を見てれば治まると思っていました。しかし近くの道路を走る消防車が「津波が来ます。避難して下さい」と放送しているのに気づき、急いで家に帰りました。津波は町の中心部まで押し寄せて来ましたので、避難場所に行くことができず、家の屋上に上がりました。そこで見た光景は、海からの水と川が逆流して堤防を越え町の中心部に流れ込みました。またたく間に町全体を丸のみにしたのです。車は黒い水に回転させられながら流されてきました。橋の上には取り残された人と車も見えました。もちろん私の車も流されて行きました。木造の一軒家が津波に押されて電柱にぶつかりながらバリバリと音を立てながら刻まれていく様子を見て尋常ならざるものを感じました。あたりが暗くなり、とても寒い日でしたので、暖を取りに下の階に降り、水が来ていない部屋を探し、そこで一夜を過しました。町は真っ暗で何の音もなく、絶え間なく続く余震に寒さも加わり、震えながらここにいて大丈夫かなと身の危険を感じながら不安な一夜を過ごしたのです。夜空を見上げましたら、何事もなかったかのように、きれいな満天の星空でした。

翌朝、一階の店舗の中は物が散乱してやっとなこと外に出たら、町はまるで、ど

この国で戦争が起きた戦場そのものでした。津波で流された車が何台も積み重なり、想像を絶するほどとても悲惨な状況でした。がれきで歩きづらい中、「〇〇さん、どこにいるのー」と懸命に探している家族があちこちで見受けられました。私は近所の方と道端で会い、母、兄夫婦が裁判所に避難していることを知り、安堵しました。避難先で炊き出し作業に加わり、支援物資が来るまで、避難所におにぎりを配布して歩きました。その時、宮城から岩手、青森までの沿岸部が壊滅的被害に遭ったことを知りました。気になる大槌の自宅へ行ったのは津波の日から10日後でした。やはり水が入っていましたが、直して7月末には自宅で生活することが出来ました。千年に一度の津波とはいえ、未だ行方が判らずにいる知人、そして日が経つにつれ両手の指で数えきれないほどの知人が犠牲になった事を知り、知人との在りし日のことが思い出され、涙の毎日でした。

今回の津波でいろんなことを学ばせていただきました。普段あたり前に行っていることがあたり前でなくなったり、すぐ、ありがたさを感じましたし、災害の復旧には、自衛隊の方々又、ボランティアの人や警察の方々にもお世話になり、感謝感謝の連続でした。そして電友会、退職者の会の全国の皆様から心温まる、たくさん、たくさんのご支援と励ましの言葉を頂戴し、心に勇気と希望を持つことが出来ましたことを深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

忘れられない、忘れてはいけない私の3・11です。

平穏な日常を奪ったあの日

釜石地区電友会
久保 紀子

あの日、家におり強い地震を感じ駐車場へ出たら、車が前後に激しく動きいつもと違うと感じましたが、家の中の落下物は少なく大丈夫かなと思ってしまいました。

町内会長がすぐ避難するようにとまわっていた。自分も役員をしているので、近所を誘って訓練と同じ気持ちで、直ぐ帰るつもりで釜石小学校へとバックひとつで向かう。

まだ隣の知人が避難して来ないので心配で登校、坂の下ばかり見ていたら、高台から悲鳴・叫び声が聞こえ、木の間から見たら学校の下を泥水が渦を巻き、車何台もまわりながら家につかかっており、あつー本当に津波が来たんだーとその時はじめて見たのですが、事の重大さは分かっておらず自分の家の無事は信じておりました。学校の教室に近所の方と入ったのが長い避難所生活の始まりでした。携帯電話は全く通じなく、学校の電話も不通市役所の方も歩いてしか情報は交換できないと言われ、何もわからない孤独感に襲われました。唯一頼りのラジオからは情報をお寄せ下さいとアドレスの連呼をしているが、こちらからは何の手だてもない虚しさばかりの長い夜の始まりで、段ボールを敷いて一枚の毛布に二人で入りお腹の減りも忘れ、不安な夜を眠れず過ごしました。

夜明けと共に学校を降り、地獄の光景に目を見はるばかりでやっと静寂な誰もいない街の中に隣人3人とで我が家を目指しその光景に唖然とするばかりでした。

お隣さんは土台だけが残りその辺に家の姿も全くなく何一つ消えて無くなってました。私は家を出る時に16年間一緒に猫をおいて出たので、猫を探す一心で瓦礫をかき分け2階へとやっとの思いで上がりました。幸いに2階は無事でした。

2日目に家に行ったらやっとな猫が出てきて無事を知り涙しましたがそれからが大変でした。猫の餌も流され食べさせるものがなく苦

勞しました。

4日目に妹夫婦が訪ねてきてくれて私と猫はやっと助けられました。避難所を出る時申し訳ない思いでしたが妹に皆心配しているからとせかされ、猫の事もありと江刺の妹宅に世話になりました。

避難所は水が出なかつたので歯磨きは出来ない、トイレの水は流せない、勿論顔も洗えないの4日間で身体を動かす事もなく、孤独なただ呆然の何日間でしたが、妹宅に着いてあたりまえの生活の幸せが身にしみました。

2年以上が過ぎ何もかも家の跡は綺麗に無くなり、住む場所を失いまわりは誰も知らない仮住いの不安な生活は続いておりますが、皆様の暖かいご支援、沢山のお力を頂き感謝で一杯です。

本当にありがとうございます。

大津波

釜石地区電友会
佐藤 恵蔵

3・11大震災から2年半が過ぎた。今も尚その情景は脳裡、全身に刻まれている。

前年から地震が頻発した。震度4、5、と

きに6。津波警報も出されての繰り返しは日常化し慣れっこになっていた。

午後2時半。いつものコーヒータム。ズシンと大きく揺れたのは間もなくである。微動になる。再び強い震動、又かと思ひながらカップを手にした時ガタンと更に大きく揺れた。とつさに電灯が落ちないか天井を見上げた。今までになく激しく強く長い揺れである。大津波警報を告げるとプツリとラジオが切れた。同時に市内防災放送の声も消えた。停電であった。一瞬、無気味な静寂。

妻が二女の手を引っ張るようにして2階からかけ降りてきた。

「お父さん！逃げるんだッ！」

私も不安を感じる。急いで2階上がった。書斎は本が散乱、茶の間のサイドボードが傾き足を入れることができなかつた。

その光景に一層不安になり急いでダウンジャケットをはおり、ウエストポーチを腰につけると追われるように外に出た。

玄関を走り出たところで「男の人は手を貸して！」と民生委員のT氏が叫んでいた。

後日、この人はその場を離れ、一人避難していたと知る。

私は彼の指示のままに走り向かう。近くのHさんである。車椅子の一人暮らし。

「お父さんは年だ、あぶないから行かないで！」と娘の呼び止めるのが後ろから聞こえた。

Hさんはうろろしながら持って逃げる物を探していた。走り寄った町内の消防団員H氏と急いで大柄な彼女を車椅子に乗せると路上に出した。避難所の体育館に急ぐ通り合わせの人と車椅子を押す。H氏は他の避難誘導に走った。緊迫した空気になる。

津波襲来の声は、まだなかつた。

車椅子を押して2、3歩歩きたときであつた。

「お母さんを出すから手伝ってッ！」

必死に叫ぶ女の声があった。道路向かいの嫁さんであつた。避難所を目指す人々は振り向かず走り去つた。

私は思わずそこに走る。消防のH氏や近所のCさんの孫が続いた。続く人が更に増えて暗い居間に土足のまま上がる。先導のH氏の青白く光るヘッドランプにベット上の寝たきりの老婦人がぼんやり見えた。

「ヒナン、ヒナン！」口々に叫ぶ声に反応がなかつた。彼女は言葉も不自由になつてた。「タンカ！」「戸を外せ」鋭い声があったが不可。津波を叫ぶ声はなかつたが緊迫した空気が破れる寸前であつた。

H氏の指示で彼女が敷いて寝ている毛布の四角を4人の男が持ち上げた。素早く表に出る。通りかかった軽トラが様子を察して無言で後部荷台に乗せてくれた。その横に私一人腰をかけると車は焦るように急発進した。

その時である。突然、左手に大きな白い壁がゴーツという音を立てて広がった。高台の国道を超えた波しぶきと思った瞬間、冷たい水のような海の底に沈んでいた。

冷たい。凍る。痛い。泥の海水を飲む。

痛覚も消えてもうろうとなる。さつき離れた妻と娘がぼんやり浮かぶ。このまま死ぬのか、ダメ、生きる、無意識で手足をバタバタする。水上に顔を出す。波に叩かれ海中に浮かぶ、沈む、虫けらのように翻弄される。

朝日屋菓子店、エスエス薬店、都クリーニング店、遠野屋が斜めに倒される。そしてわが家の二階が目の前で無くなる。動画のように異様な光景が海上で展開した。嬉石町は一海面になった。

どう漂ったのかわからない。水上に顔を出した時一台の軽トラックが流れてきた。倒れかかった藤原さん宅の裏角に当たり止まる。二人の婦人が乗っていた。近所のMさんと鶴住居に嫁いだ娘のKさんであった。水中からはじめて見る人の姿である。娘は母の手を引

きゆらゆらする流木や畳を必死に渡り崖にしがみついた。二人はよるめきながら駆け上がって行った。

私は助けてくれと叫ぶことはできなかったが力が湧いた。何度か失敗しながら流れる柱の一本につかまり浮上した。身にまとった衣服は百貫の重さだった。最後の力を振りしほり同じ崖をよじ登った。

必死に探し回った妻と娘はガタガタ震えている私を見つけるとズブ濡れの着衣を剥ぎ取り裸同然になって自らの衣服を着せて体育館に運んだ。居合わせた地元のS看護師の適切な指示は瀕死から救ってくれた。

その夜、真暗な体育館は人探しに出入れる人、命を落とした家族の叫び、子供の泣き声が戦場さながらに充満した。

7日目、車が走れるようになって、会社後輩のKR氏が迎えに来てくれた。北上の彼の家で衰弱した私は養生できたのである。

(神奈川県 相模原市にて)



3・11あの時 私は…

釜石地区電友会
前川 正博

3・11は思い出してもぞつと！する一日でした。当日は仕事が休みで自宅の二階でくつろいでいたとき、激しい振れに恐れこれらは唯事ではないと思いいいで1階に降りようとしたが振れが激しく今にも家が壊られるのではないかと思うほどぞつとの思いで逃げ道である玄関の戸をあけることが出来、台所を見ると家内が落ちた食器類を片付けていたがやめるようにと伝えていると、電話が鳴り、中三の孫から大津波がくるので早く逃げるように、ほくも高台に逃げるからと言いつつ電話が切れました。急いで家内に長靴と防寒着を着用させ急いで車に乗せ、近くにある高台の大槌高校に向ったのですが登り口は避難する人と車でごった返していましたが高校の教員と思われる数人の方が交通整理をしていてやつとの思いで校庭に辿り着くことができほつとして眼下をみると登ってきた道は海水で溢れていてぞつとし、5分も遅れたら恐らく命がなかったとつくづく思いました。

とにかく雪も降りはじめ寒いので車のエンジンをかけ放して暖をとりまわりを見ると校

庭や体育館は避難した人々で溢れていて混雑していましたがまず、娘や孫達が無事であるかの確認が先だと思い校庭を探してやっと無事を確認することが出来ほっとしました。

夜になると爆発音がひんぱんに響き火の手が上り車から出て見ると町の方は火の海になっっており夜空を焦すくらいの勢いでまさにこの世の地獄絵図の有様です。これでは我家も燃えて、いるように見えもう駄目かと思ひ観念せざるを得ませんでした。

翌朝、被害を受けなかった家内の妹宅に身を寄せ一週間ほど世話になりました。いつまでも世話になるわけにはいかず身の振り方を考え、知人に依頼して娘や家内達は埼玉に居る長女のところにやり、自分は家のことがあするため実家の近くに住む妹宅に身を寄せたのですが、車のガソリンが底をつき3月末までガソリンが手に入るまで全然身動きがとれない状態が続きましたがやっと知人の世話で手に入り家の状況を見ることができ、又、退職者の会の方々が道路状況が最悪の中、安否確認のため再三訪れていただき再会でき感謝し又、お話の中で何人かの同僚の方が亡くなったことを伺い、各地域も大変な状況であること知り愕然としました。

その後、仕事先から長男が帰り北上市の雇

用促進アパートを見つけ4月15日に移動し、埼玉に居る家内も呼び北上市に落ちつくことになりひとまずほっとした次第です。

会の皆様には遠くなった北上市までわざわざ訪れていただき、ご支援やご厚情に対し、又NTTや電友会のご支援に組織の有難さを感じしみと感じ、心から深く感謝を申し上げます。次第です。

振り返ってみると災害はいつどこで起るか判らない。昨今、小生も車で走りながら常に思うことは、いろいろな情報を聞いてみるとなぜ早く逃げなかったのかと申す方が大部分ですが、様子を見るのではなく早い決断で身の安全を測ることが大事であることをつくづく感じました。現在、家内が体調を崩し入院生活を送っていますが、老い先短い人生を皆様のご厚情に甘えることなく前向きに考え、残されたわずかな人生を有意義に過ごしたいと心がけております。

最後にNTTと電友会の益々の発展を心から祈念申し上げます。
ありがとうございます。

(北上市にて)



五ッ橋クラブ 桐ヶ窪 明夫

神様に守られて

おおふなと電友会
安城 恵美子

忘れられないあの大地震はすべての物や命を破壊し沖へ運んでしまいました。でもありがたい事に私達家族の命はおいてゆきました。

その日、家には5人(私、母92歳、姪、姪の友人2名)おりました。実は当日のスケジュールは3日前に変更したのです、姪の友達が来ることになり私は外出を中止しました。この事がなければ、私達は生きていられた

かつたでしょう。

友人2人とも約束の3時前に着き玄関に入ったらすぐ地震でした、母がすぐ「鍵をかけて息子の家に行きましょう」と震えている私達に大声で指示しました。

車椅子使用の母を皆で自家用車に乗せ何も持たずに車に乗りました、渋滞で道に出られない時、若い女性と反対側の保冷車の男性が道を譲って下さいました。

2キロ位走ったら一歩も進まなくなりました。思案していたら、止まった所が丁度分かれ道の真ん中でした。右の道は長い橋がありそこを越えると山側なので「神様守って下さい」と念じ思い切って橋を渡りました。

見たら海側は白く霧がかかっており波はもうそこまで来ていたので、後で見ると通って来た道は津波が押し寄せていました。道を譲ってくれたお二人が助かっていて欲しいと思いつつながら頂いた命に感謝致しました。

それから4ヶ月後仮設住宅に入居致しました、部屋は集会所のすぐ前で、いつも災害物資、炊き出しイベントなど全国と外国から来てくれたボランティアの方々活躍を感謝しております。この日本に世界に、こんなやさしく思いやりのある方がいる事に感動し涙しました。そして小さな自分が恥ずかしく思

いました。

やがて公民館を作り少しでも役に立ちたいと活動を始めました。段々に308世帯の皆さんが一つの家族の様な生活となり助け合うことが、生きる力となってまいりました。

NTT労組、全国の電友会の皆様からの義援金、NTT共済会からの義援金、何年もお会いしていない先輩の方々からの見舞金、たくさんのお豆腐を戴きました。ありがたい事です。

震災のお陰で、悪いことばかりもなく、暖かい人を知り、各団体や海の向こうの外国人を知り、本当にびっくりすることばかりです。人が人を呼び、人が人を助け、人が人に希望を与え、この素晴らしいつながりを教えて戴いた皆様に私は感謝の気持ちでいっぱいです。

支援に訪問して下さいる方々も不安と悲しみを胸に、来てくださる事が良く分かり、勇気を持って訪れてくれるので私達住民に出来ることは大きく手を広げ暖かくお迎えすることのみです。

世界の人々、日本の人々にいつか元気な姿を見せられる日が来るよう頑張りたいです。

全国・全世界からの支援に感謝



おおふなと電友会
岩城 恭治

・震災・その後

地震の際は、大船渡合同庁舎で「市民活動相談日」を開いていました。建物が壊れると思ひ、外に避難しますと、すでに県職員がおり、カーラジオから大津波警報発令が流れていました。地震が終わるのを待って、自家用車に乗り、国道45号に向かいますと、停電のため信号機が動かず、無理やり割り込み、自宅へ向かいました。大きな道路が渋滞していましたが、裏通りを通って我が家に着きました。どこからか津波が来たぞ！という声、家を出て見ますと、波に乗った自動車が見え、直ぐ高台へ向かいましたが、寒いのに気が付き自宅へ戻ったりし、高台へたどり着き、遠くに見える大船渡湾の大型船、NTTビルが津波で浸水している状況が見えました。幸いにも我が家の20メートルほど手前で津波が止まりましたので被災しませんでした。

その日は、避難場所のリアスホールで一夜を送り、翌日からは自宅で生活しましたが、近所の被災者宅の泥出しや、陸前高田の義姉の捜索に避難所や遺体安置所を廻りましたが

見つかりませんでした(1ヶ月後DNAで判明しました)。

・被災地のNPO活動

地元のNPO法人の理事長として、何かをしなければと考えていたとき、「愛知ネット」理事長の訪問を受け、早速他の市民活動団体と共に「気仙市民復興連絡会」を立ち上げ、支援物資の運搬や炊き出し、瓦礫から写真探し等の活動を開始、私たちのNPOとしても仮設住宅パトロールを始めました。震災から2年半が経ちましたが、現在は地元NPO法人として色々の被災者支援活動を行っております。

・静岡県中部支部長が訪問

今年7月初め、禅画等を贈ってくれました東海電旧友会静岡県中部支部長の吉田英一さんが私的に大船渡市を訪ねてくれました。希望を聞いたところ「仮設住宅を訪問したい」との話でしたので、2カ所の仮設住宅を案内しました。集会所に入りますと、同行の奥様と共に、持参しました手品の紐や折り紙で、集まった方々と一緒に手品で楽しみを与えてくれました。

・最後に

おおふなと電友会も3名の会員が犠牲になり、家屋も32名の会員が流失や全壊など大き

な被害を受けました。三陸沿岸は津波の常襲地帯と言われるだけに、今後のまちづくりは減災と人命は守られる「新たなまちづくり」を望んでいます。

最後になりましたが、全国の方々からの温かいご支援に感謝を申し上げまして結びいたします。

3・11あの日あの時



おおふなと電友会
及川直

あの日にはNIT大船渡ビル旧事務棟の2階で毎月開催しているパソコン教室に参加しておりました。7:8人がいたかと思われまう。午後2時半頃喉も乾いたのでお茶でも飲むと皆で休んでいました所、あの運命の2時46分に海の方からゴ・と凄いい音が聞こえてきました。2日前にも少し大きな地震があったので又地震かと思っていたら、今までに経験をしたこともないような強震で身をすぐに机のしたに隠れてやむのを待ちましたがなかなかやみませんでした。こんな地震だと我が家は全壊して跡形も無いのだろうと思っておりました。しばらくして、揺れも無くなったの

で津波が来ると思い退室することにして部屋をでたら、方々の防災シャッターが下りていてどこからビルの外に出るのかわからない状態でした。入ってきた玄関にたどりついたら停電のため電子錠がロックされて出られませんでした。やっとのことで外に出て車に乗ってスイッチを入れたら津波情報のニュースで震度6弱・マグニチュード9と聞いておりました。車の中から当たりを見ると木造の家屋でも倒れている家屋が無いので自宅も大丈夫だと思つて急いで帰りました。帰り道、交差点の信号機は停電のために動かなくて大変な混雑でやっとの思いで無事に自宅に帰ることができてラッキーでした。帰って見ると自宅は被害なしで安心しましたが、本震が収まったと思つたら余震もすくくてどうなることかと思つていました。余震に脅えていたら遠くの方で津波がきたので高台に逃げろーと大きな声がかこえてきました。妻と、足が不自由で歩行困難な隣の奥さんと3人で高台にある大船渡地区公民館に避難しました。地区館に行つてももうすでに避難してきた人で一杯でした。小さな子供からお年寄りまで400人近くおりました。高台から大船渡の街を見ると海水が屋根の上まできて次々と家屋をなぎ倒し、見ているだけでどうすることも出来ませんで

した。私と一緒に見ていた同僚が、ああ、おうちの家が今流されたといつて呆然とした顔をみた時、なんと声をかけたらよいのかわかりませんでした。あの日は小雪が舞って大変寒い日でした。海水に濡れた体・こども・お年寄り・体調の悪い人皆さんお互い大変不自由な状況下で頑張ってお互い助け合い、励ましあつてこの難局をのりきってくださいました。私も運よく津波には流されませんでしたので、あの日から大船渡地区公にいつてもともと思いい町内会の皆さんと一緒に、災害本部の指示の元で50日間ボランティアをやってきました。津波で家や家族や親戚・大切な友人知人を流された皆様また職場がなくなり働くところがなくなつた方々に対して震災前のような生活が一日でも早く来られます様願っております。

大津波に遭つて九死に一生



おおふなと電友会
及川 彌

私の家（明治30年平屋建て）は海から30メートル離れた所にある。平成23年3月11日の家族の行動ですが、私は9時20分頃大船渡

市役所へ、母（94歳）は自宅で炬燵に入つてテレビをみており、妻は体が弱く、自宅から500メートル離れた大王杉（7000年の古木）前の別棟で別居生活をしていた。午後2時46分突然マグニチュード9.0との強くて長くて大きな揺れの震度6弱の地震が大船渡市を襲う。議会中で私は咄嗟に机の下に潜つた。長く強い揺れが続き、職員、議員は議場から出る人、壁際に立っている人、机の下に潜っている人と、人それぞれの考え思いで避難行動をしていた。地震が治まつたので事務局へ帰りますと断つて、急いで家に戻る。途中三陸自動車道を走っている時ラジオから20センチの第一波があつたこと、大津波警報の放送を聞きながら、2日前には60センチの津波があつたことを思い出しながら越喜来の自宅へと車を走らせる。越喜来に入り、大王杉の下にある叔母の家があり、母が叔母の所に避難していることを知り、車を叔母の家の庭に置いて500メートル離れた自宅まで走つて行く。家の前の越喜来漁協の駐車場に消防団等3、4人居たようだが、声も掛けずに家に入る。先ず仏様前に異常がないか様子を見に行く。花瓶が下に置いてあり（妻が落ちて横になっていたのを立てて、母と逃げた後）、写真も落ちていないし、特に変わつ

た所はなかった。茶の間に戻り上着を脱いでいたら、「津波が来たから逃げて」と大きな声が玄関からしたので急いで靴を取りに行く。左の窓ガラスから護岸を超えてくる「ナイヤガラ」の滝のような光景が目に入る。そして一気に石垣を超え家に押し寄せて来る波を後目にしながら、勝手口から逃げようと引き返したが、茶の間を過ぎ台所で水が腰のあたりまでになり、動きが取れなくなる。右側に冷蔵庫が浮いていたので、冷蔵庫に乗る。天井がたちまち目の前に迫る。勝手口のドアの上の小さな窓から長屋が傾いているのが見えた。私はこのまま水を飲んで死ぬのかと、一瞬「死」が頭を過つた。茶の間の天井が高いので移ろうと思つた。どの様にして移つたか思い出せないが茶の間の天井もたちまち近くなり、海水の勢いで天井を破つていた。太い梁が現れ、屋根板の釘がワイシャツに絡まりなかなか外れない。無理やり引張つて取る。この後どのような状態で屋根の上に立つか記憶にないが、とにかく屋根の上に立っていた。陸の人がオレを見つけてくれと思ひながら陸の方を見て流されていた。松の木（80年大木）が目に入り咄嗟に飛び移る。どの位の時が過ぎたのか下を見ると水が引けて地肌が見えていた。折れた枝に掴まり

ながら急いで降りる。クツ下の足で流された家の跡を注意しながら高台の県道を目指して走る。道路に上がり歩いて娘婿の家に向かう。2、3人に会ったが誰か思い出せない。急に寒さが軀を襲う。手足が震えている。寒い寒い。家に着くと当家のばあちゃんが私の全身濡れた様子を見て、たんまげて、バケツにお湯とタオルをすぐ持つて来てくれた。軀を洗い、当家の主人の下着を借りて着る。炬燵に入って暖かい牛乳を頂く。(炬燵に火は無なかったそうだ)牛乳を持った左手の震えが止まらない。寒さのせいなのか、ほつとしたと同時に恐怖心が起きての震えなのか、震える手をじっと見ながら、「寒いのが」「オツカネガッタのが」と手に問うている自分と、震える手を止められない自分が可笑しかった。その晩は孫たちと炬燵の周りで寝る。翌

12日から女房の実家でお世話になる。最初の夜、外へ出るとヒヤッと冷気が軀を包み、澄み切った夜空には明るく強い光を放つ星がこぼれ落ちそうに広がっていた。

素晴らしい満天の星空の夜に、あの巨大な地震・津波が昨日あったことが嘘のように思われた。「津波でんでんこ」は私たち夫婦には当てはまらなかった。人には思いの心・感情がある。住み慣れた家への愛着、家族や肉

親への感情、助けたり助けられたりの絆、そういう思いや感情が、犠牲者を多く出す原因になるとは思うが「津波でんでんこ」は私には重い言葉だ。

あの日から

おおふなと電友会
村上 ミキ子

「あの日・あの時」と言えば暗黙のうちに3月11日の午後2時46分を指す。自分は、あの日は朝から市外に出かけてて難をのがれた。帰りの車中で地震、ラジオをつけたら大津波すぐに家に帰らなければと思った。なぜ：なぜそう思ったのか：でも家に帰れなかったおかげで、あの恐しい出来事にもあわなかったし、見ないで済んだし、生きてられた。我家はどうなったのか、見に行けなかった。何日かたって気持をもちなおして見に行ったら、土台のコンクリートだけで、瓦礫すらなかった。今までコツコツと積み重ねたものが、長い間手塩に掛けて育てたものが、いろんな思いをかけたものが一瞬にして全部流されてしまった。

そして毎日会ってた人達、話をした人達、

近所の人達が何人も流された。皆さんは、避難所だった体育館に避難したのでしょいか、松原地区の町内会220世帯で、犠牲者が180名にもなった。犠牲者の数にもびっくりしました。が亡くなった方々の名前や町内会の方達の避難先等が、個人情報保護で、思うように知ることが、できなかったことにもびっくりしました。町内会も解散してしまいました。

あの頃の会話「ああ 生きてたのね。よかった！家族は：」と、手をとりあって又抱きあって、難をのがれたことを喜びました。震災前の平穩だった時には考えられない会話の内容です。信じられません。

町内の今は地盤沈下で、海がすぐ近くになって、以前を思わせるものはひとつもなく雑草だけが勢いよく延びていて、工事車両が行き交っています。

仮設での生活も、狭い暑い寒いと、ぐちりました。2年半を過ぎた今は環境にも、狭さにも慣れて、そんなに苦にならなくなっているのかもしれませんが、動くように努力はしています。足腰もそれなりになって、弱くなっているように感じます。

早く早く仮設生活を卒業できるように、努力しなければと……

いつも頭の痛い毎日です。

3・11あの日あの時

遠野地区電友会
赤坂 トヨ

2時46分、大きなゆれと海岸では津波が発生、千年に一度とか、1933年3月3日の津波も聞いた。私のふるさと附馬牛つばまうしの人達が農業の休み期間、手間取りに大槌方面に行つたとき、泊まる所がなく高台の方に泊つたその時の夜中にドーンと爆発のような音がしたそうさ。次の朝起きて下の方をみると昨日みた町がなんにも無くなつていた。運がよくと云つたらおこられそうだが命からがら帰つたと80年前の話しを聞いた事があります。

今回は昼の事とはいえ、私の記入していた数は3県で15844人(3451)の亡くなった人、ゆくえ知れずの人です。その中の1人NTT釜石の瀬川さんが居ました。夫婦で市民病院へおみまいに行った時のこと、2人は手をぎつちり握つて離さないよう、一生懸命頑張つても水がぬるぬるで、とうとう離れてしまい、幸子さんは流され見つかつたそうです。ご主人は自分も一緒に行けばよかつ

たと嘆き悲しんだとの事で、想像を絶することだつたと思います。又私の同郷の同級生は釜石に嫁いで家計を支え家も建て子供も2人育てて70才になってやれやれと思つた所、まさかあそこまで津波は来ないと思つてた、もう命からがら山へはいあがり自分の家がどんぶりことんぶりことあつちにおつちこつちにおつちこつち流れるさまをただ涙の出っぱなしで見送つた事を話されました。仮設で2年6ヶ月になる私も何か出来る事はないかと思ひ、その時の事を同級生、先生を交え20人ほど集まり話しあいました。色んな話しが出ました。今手術に入る寸前だつた事、お風呂に入つて

なんとらお湯がだつぽだつぽとなるんだべ、とまるでなにごとが起きたんだべとおおさわぎの事。数日電気はつかない、電話は通じない、ガソリンは無い、文明の世の中にこんな不便を感じ、命はあつてもむなししい思い、自然のあれくるつた出来ごと、どこでも何がおそいかかってくるか予想もつかない。幸せとは、悪い事がおきない事と瀬戸内さんは云つている。宮沢賢治さんの言葉「世界が幸せでなければ、個人の幸せがない」その通りです。

肝に命じて皆んなが幸せになるように力を合わせ平和に暮らせるよう願うばかりです。

伝える 続ける
連なる



遠野地区電友会 藤田 委智子

あの時私は

遠野地区電友会
及川 裕允

震災当日は草加市に滞在しておりました。

義兄の葬儀も終り新幹線で帰宅するためJR大宮駅から乗車することとし15時発の列車をプラットフォームで待つておりました。30分位前に仙台行き列車に乗りますという、お客さんと話しをして、その列車を見送って地震に遭遇したのは間もなくだったと思います。こんな揺れを感じたのは初めての事です。新幹線の架線は音を立てて壊れんばかりに揺れますし、天井を見れば電気器具、表示板等は今にも落下しそうで、ホーム自体も揺れていますので椅子につかまらなと立って居られない状況でした。見ると、女性客の1人がホームに座りこんでいました。上には電気器具等がありましたので危ないと思い、できるだけ安全と思われる場所へと誘導しました。後で家内から、私のことをほったらかして人の世話ばかりだったと言われる始末でした。怪我もせず無事に揺れも治まりましたが当然、列車は来ずホームから降りる事となりました。駅構内に入ると天井は一部落下し騒然としており、テレビは各地の被災状況を映

し出していました。大変な事になっていると、その時思いました。外に出ると駅周辺は帰宅困難者で溢れかえっていました。物すごい人数です。タクシープールには車は一台もありません。携帯電話も繋がりません。身内に連絡を取ろうとしているのでしよう、ボックス公衆電話は長蛇の列でしたが、その中で1カ所だけ2、3人位しか並んでいない公衆電話がありました。行ってみるとカード専用公衆です。幸いテレホンカードを持っていましたので義姉に遠野に帰れない旨の連絡を取ることが出来、車で迎えに来てもらいました。車の渋滞は言うまでもありませんが帰宅困難者のみなさんはどうされるのだろうかと思案中に考えていました。次の日から家内の実家が山田町ですから安否確認をインターネットで確認しようと言う事になり甥が懸命に検索をかけたのですが、なかなか見つからず、やっと三日目に避難所に居ることが確認できて皆ほっとしました。今度は私たちが帰る手段の確保でした。新幹線の運転再開の目処は立ちませんが、従って望みは飛行機しかありませんが、それも花巻空港への直通便は無いということで行き再開を待つしかありませんでしたが3月24日の臨時便を確保することが出来て帰宅することが出来ました。戻ると知人、友人も

被害に会われていることを知らされて心ばかりのお見舞い、支援活動を友人といっしょになって取り組みました。自宅の後片付けも済み4月に入って山田町に行きました。町は瓦礫の山です。実家は跡形も無くなっていました。義母の落胆ぶりは例えようもありませんが心の支えになりたいと思つてます。最後に被災地に対する支援のあり方も多岐にわたると思います。希望の持てる地域づくりが加速されるよう願つて止みません。

あの時私は

遠野地区電友会
菊池 貞子

地鳴りがドッドドドと思つたらガタガタとすごい音で揺れ出した。いつもこんなに揺れてもすぐ治まると思っていたが仲々治まらずバツンと音がしたら電気が消えた。早く家に帰らなければと思った。外に出たら車がゆらゆらと揺れていた。電線も揺れ、向いの2階の窓が外れてガチャンと下りた。車に乗って発車した。信号が止まっているので枝道からは仲々出られなかったがどうにかして家

にたどり着いた。家の中は物が散乱していた。その晩は地域の人達は公民館に避難するように連絡があったけれど息子夫婦と孫達だけ公民館にやって私と夫は家に残った。近所を回って安否確認をして歩いた。家の中に居ると寒いし、余震がするので車の中に居た夫婦もいた。ローソクを灯し反射ストープで暖を取った。余震が続くのでそのたびにストープを止め、ローソクを消す、この繰返しをして一夜を過ごした。夜明けが待ちどうしかった。3日目に電気も水道も使用することが出来一安心した。ラジオで津波の情報を聞いていたがテレビで始めて見た情景にあぜんとしてしまった。自然のなす技の恐ろしさにただただ驚いてしまった。即、遠野市は後方支援に徹し、公共施設は、被災者を受け入れることになり地区センターに来た人たちの食事作り、被災地へはおにぎり作りをする。ある材料で被災してきた人たちにいくらかでも心が和むようにと思って食事提供をした。日が経つにつれ被災してきた人たちは、子どもどころ、親戚、知人を頼ってそれぞれに行かれた。その後は、公的機関の人たちが泊っていた。この人たちには食事提供はしなくてもよかったけど、一週間に1回のふれあい開催日に夕食を作っておいた。いつもカップ麺など

インスタントばかり食べていたようだったので、大変喜んでいただいた。70年生きて経験したことのない事ばかりだった。高度成長と共に便利な中で生活していたのが一瞬にして暗転してどうなるかと思った。けれどいつどんな災害がどんな形で来るか心して生きなければならぬ。雨が降ればゲリラ豪雨、風が吹けば竜巻、今ままで考えられない事象ばかり発生している。常に家族でまた地域で話し合っていかなければならないと思う今日この頃である。

あの日のことを振り返って

遠野地区電友会
田代 明子

あの日あの時私はかたり部ボランティアで遠野駅隣のある一室で仲間3人と会話に花が咲いていました。2時46分「あつ地震！」とどんだん大きくなるゆれに同じ部屋の下にいる観光協会の職員の大きな声「早く外へ出て」足元も浮く様な感じで外へ飛び出しました。雪がちらちら降りすごく風もあり寒かったけど建物から少しはなれたタクシーの待機場に皆で集まり状況確認、丁度私はラジオを持つ

ていた。釜石に大きな津波が発生しているとの事、これは大変、今までこんな事がないので身も心も不安の塊、駅前を通る人にも「屋根の下は歩かないで！」と大きな声でさけんだり家はどうかっているだろうと心配、子供達からは「どこにいる。信号機が止まっているので運転を気をつける。家にいっても停電なので片づけしないで本家に泊まれよ」との連絡。本当に何を先にすればと、落ちつかない気持ちでした。何を考えて運転していたか覚えていませんが家の近くに来た時、友達のご主人の声「明子ちゃん屋根が…」と心をいためる様に静かに聞こえた。びっくりさせてはという心づかいだったと思っています。家の前には瓦のかけらが散らばり声もでませんでした。誰かが片づけてくれたらしく道路はちゃんとしており一ヶ所に山積みになっておりました。本当に感謝しております。家の中に入ったらガラスの破片、コップ類が割れたのでしよう。停電なのでそのままにして各係に連絡し本家に宿まった。(1人ぐらしは地区センターに避難しなければならぬので)3月11日まだ寒く湯タンポをだきながら目をとじているうち「火事だ」と女の声、夢かと思っていると次々に声が、急いで起きて外に出た。隣が火事、すごい炎「中に人がい

るはずだ……」と騒ぐ、結局は1人が死亡とい

う悲しい事実だった。時間がたつにつれて未曾有の大震災、先人達が大切に繋いできたこの命、社会、文化自然の前には無力であったことを思い知らされる一瞬でした。家族、家財、土地、仕事、ふる里、生きがい全てを流され、そして亡くなられた方々の苦しみ、無念さ、お慰めの言葉すら見当らない私、毎日悲しみの報道を見るにつけ私達に出来る事は何か？と考えました。遠野は後方支援地となり自衛隊の車、消防車、赤十字の車、警察の車、ボランティアの車等々騒然の毎日が続きました。役割を果たすために！

公共施設も宿泊所になり毎日おにぎり作り洗濯ボラ、入浴施設の掃除ボラ、かたり部のボラ、老人介護施設そのものが当地で業務をしていたので(約1ヶ月)その食事のボラは地区全体でローテーションを組んで協力、人々の幸せの為に仕事をする事を使命と心得て。2年7ヶ月もたつて現地の人々はどんな心で生活しているのか、何もなかった様に海も落ち着き、生活がなくても緑の草がはえ、花も咲いているところもある。人は助け合いお互い出来る事をみつけ手と手をとって未来に光を！そして語り伝えていこう！平和を祈りつつ！

あの日思ったこと

遠野地区電友会
中屋敷 仁

突然M9.0の地震が発生した時、私は釜石市の水海岸にあるテレトラック(競馬)で遊んでいた。

急いで外に避難したが、人々の関心は、電気の復旧はいつか、競馬は続けられるのかで津波には考えが及ばなかった。

地元の人々だろうか、次々と車で退去するのを見るにつけ前年のチリ地震津波のときのことを思い出した。列車の運行停止、釜石駅前の交通規制による移動不能。

急いで釜石から脱出することにしたのは、地震発生後10分位はたった後と思う。

テレトラック管理者からの事態の説明は未だ無い、客を避難させる決断を下す権限は無いようである。

釜石から遠野に帰るには、45線から285号線を通らなければならぬが、車の渋滞が始まって283号線に出れなかったが、幸いにも裏通りに入ることができ易々と283号線に入り帰ることができた。

途中の街には避難する人は見えない。脱出する私達には幸いでした。

帰宅して、事態を把握しようとしたが、停電でテレビはだめ、ラジオは電池が無い、夜になって市民センターへの避難指示に従ったがどう過すかの説明がない。

家の方が良いと思い戻ったが、暗い、寒い懐中電灯をつるして明るくし、ペットボトルで湯タンポをつくり寝れぬ一夜を過しました。落ちついてから、非常のとき、知識、想像力をフル回転させて、いかに対処すべきか、決断できるか、考えたら寝つきが悪い。

・前年のチリ地震津波のとき

釜石駅の待合室から、駅員の指示に従って隣りのシープラザに移動したものの駅員は見えない。引卒しないで自分達だけプラザ遊という所に避難していたということを翌日になって知ったが、所詮、近頃の客扱いはこんなもんだらうと抗議はしなかった。

ガソリンと灯油が手に入りませんでした



盛岡電友会
根本 泰秀

滝沢村の自宅から隣の盛岡市に出かけて、ちよつと遅いランチ。ラーメンを注文して待つていました。突然、あちこちの携帯電話

から緊急地震速報音「ウー！ウー！ウー！」が一斉に鳴り響きます。

携帯電話に「エリアメール」が着信しています。「緊急地震速報。宮城沖で地震発生。強い揺れに備えてください（気象庁）」

1分後、ドーンと来しました。従業員の指示で外に避難します。駐車場に出ると、建物が大きく揺れて、車がダンスしています。揺れが長い間続きました。

揺れが落ち着いて店内へ戻りましたが、鍋釜が散乱。営業を継続できる状況ではなく、閉店となりました。

すぐ市内の実家へ安否確認に向かいますが途中の信号機は停電で消えています。消防車と救急車が走りまわっています。

実家に到着すると、94歳の母はわりと平気な顔をして出てきました。停電ですが、水道とガスは出ています。

食器棚、神棚と仏壇から物が落ちて散乱していました。大きな余震が来る度、家が揺れます。母を外に連れ出して車の中に避難させて、水道が出るうちに水を貯め込んで、明るいうちに、実家の足の踏み場だけ綺麗に掃除しました。水道が徐々に細くなって止まりました。

夜は自宅に母を連れて来て避難させました。

自宅は水道とガスは出ますが、停電しています。趣味の登山用品で灯りをとります。

一晩中、大きな余震が続いています。翌朝は早く起きて、実家とその近所に飲み水を運びます。

停電していますが、近所のスーパーは営業しています。レジが使えないので長い行列で入店するまで3時間待ち。最小限の食材を手してひと段落します。

夕方から電気は徐々に回復してきました。3日目も公共交通機関のバスが止まっています。信号機が消えているので、安全を確保できないからとか。

4日目から落ち着きを取り戻してきましたが、困ったのはガソリンと灯油が手に入らなくなること。スタンドに行ってもタンクが空で売ってくれません。室内は寒いです。灯油不足で暖房節約しています。母の介護に毎日使う車のガソリンが手に入りません。母の通う整形外科はガラガラに空いています。ガソリンが無くて医者に来られないそうです。道路を走る自家用車が少なくなりました。

1週間後、スーパーに食材が並んできましたが、一家族10点までとか、一家族1商品1個といった制限があります。

11日後、大手のスタンドで一人3千円まで

の制限はありましたが、給油できるようになりました。そして3週間後、大手のスタンドでやっと満タンに給油できるようになりました。



盛岡地区電友会 澤田 俊夫

3・11大震災を体験して



水沢地区電友会の
菊池 元

郵便局での所用を済ませて自宅前で自転車を降りたとき、突然携帯電話が鳴動した。何だ…と思う間もなくグラグラッと大きく揺れ出した。「地震だ、大きいぞ」身構えた

ところ揺れは激しくなる一方で、立っていら
れず身動きも出来なかった。

我が家とは見れば、前後左右に大きく揺れ
て軋み、ガラス戸の何枚かは外れて落下し、
ガラスは粉々に砕けてしまった。

向こう三軒両隣りは如何にと見やれば、屋
根瓦の落下音や物の倒れる音、得体の知れな
い悲鳴等々、周辺は騒然とした雰囲気に変
ってしまった。

平成23年3月11日(金)午後2時46分だっ
た。晴天・陰に残雪少し有り。

ようやく揺れが治まったのを見計らって、
用心しいしい家の中へ入って見たら、家具調
度品等は全て横倒しとなり、足の踏み場もな
いような乱雑ぶりであった。

そして、壁面にも何か所もの亀裂が走って
崩れていた。

しかし、初めて経験した大地震にもかかわ
らず、怪我一つしなかったのは、正に不幸中
の幸いと思わずにはいられなかった。

気を取り直してまずは安全の確認をした。
ライフラインは、水道・ガスは使用可、電気
電話、暖房器具等は使用不可だった。

情報源は、携帯ラジオのみで、刻々と伝え
られる太平洋岸に襲来した大津波による被災
に、沿岸に居住する友人知己の安否を思いつ

つも、何ら手の打ちようのないもどかしさを
感じる外はなかった。

そして、次は家族の安否の確認だった。妻
は入院加療中だったので、急ぎ駆けつけた。

病院内も騒然としていたが、無事を確かめ
ることが出来て安心した。かかる事態におい
ても病院のテキパキとした対処には、感謝の
外なかった。

離れて暮らす子供たち家族の無事も確認出
来て、ようやく一息ついて気持ち落ち着か
せることが出来た。

「立春」は過ぎたとは言え、未だ寒気は残
り日没も早い。

今日から何日続くか不明のライフライン復
旧までの仮寝場所の確保、最低限の食料品の
確保、そして懐中電灯・電池や暖房器具等の
有無の確認と準備……。

強弱何回となく続く余震におびえながらも
大震災第一夜を迎えたのであった。

町中は真っ暗闇で、ふと戦時中の灯火管制
下の生活を思い出した。時折通過する車の
ヘッドライトが唯一の明かりだった。

そして、天空はまばゆいばかりの星空で
あったことを、今に至っても鮮明に記憶して
いるのである。

星寒むや 余震に耐えし 吐息かな

私の大震災の記憶



北上電友会
雑賀 教子

平成23年3月11日、忌まわしいその日の10
日前から私たち夫婦は失意のどん底におりま
した。72歳の夫は定年退職後、車で20分程度
の会社に毎日元気に通勤していましたが、そ
ろそろ退めて生まれ故郷の「紀州那智勝浦」
へ旅行するのを楽しみにあれこれと計画を立
てているところでした。その前に念のために
と軽い気持ちで少々気になっていた胃の検診
を3月1日に受け、その結果は思いもしない
ほどでした。

紹介された盛岡日赤病院では治療も手術も
無理なスキルス性の癌の怖ろしさの説明を受
け、夫は「どの位生きられるか」と尋ね、入
院の日を決めて帰宅しました。

震災当日の夫は退職後の仕事の引継ぎの為
出勤し、帰宅して小1時間もした時でした。
長くて大きな揺れに夫はテレビを押さえなが
ら「津波が来るな！」と釜石にいる2人の姉
と姪を心配している様子でした。反射型ス
トープの上のヤカンがひっくり返り、夫の足
元に流れました。臆病な私はこの世の終わり

かと震えが止まりませんでした。私は釜石生まれ、夫にとっても第2の故郷です。銀行員だった夫は釜石・宮古・気仙沼と沿岸勤務が長かったので、漁業関係の友人が多く、皆さんの身を案じつつもわが身もままならず、14日に入院先の日赤病院に向いました。道路はデコボコ、新幹線の橋脚は鉄骨がむき出し、線路上では新幹線「こまち」が放置されたままでした。途中のガソリンスタンドは長蛇の列です。病院に近づくにつれ、ヘリコプターが飛び交い、非常時という緊張感に包まれ、とても不安でした。一般患者は受け付けられないと断られ、事情を説明して30分後に入院できましたが、一週間後に緩和ケア病棟に移り、手厚い看病を受け、一度も苦痛を訴えることもなく、4月15日に亡くなりました。

従弟は大槌町役場の隣で菓子店を営んでいました。津波で亡くなったことも新聞で知りながら何も出来ずにいましたが、1周忌を済ませ訪ねましたところ、従弟は役場の2階で見つかったそうです。息子さんと奥さんは配達先から急いで戻った住宅兼店舗は流され、従兄も見つからなく信じられなかったと。今は復興商店街で人気の「鮭最中」の販売に頑張っているので安心しました。義姉と姪は波に追われましたが、運転中の車を捨てて崖を

駆け上がり高校生に助けられました。周りの様子は凄まじく、悲鳴交じりの声の中で只々見ているだけだったと話しておりました。

高齢の母親は長い避難所暮らしで、エコノミー症候群になりました。短歌を愛して多くの歌を詠み明るい性格だったのに、何も話さなくなり横浜の三女の家に避難したまま2年後に亡くなりました。

私の身辺だけでも悲惨な人が沢山おられます。亡くなった方の恐怖と無念さは想像もつきませんが、少しでも明るい東北になれるよう願って止みません。



☆☆☆ 東北地方本部のホームページがリニューアルします ☆☆☆

(イメージ)



URL : <http://www2.ocn.ne.jp/~tohkuob5/> (URLは従来通りです)